

かわいそうじゃない

一宮市立南部中学校 一年

吉村 美紅



「この人達の前でピアノを弾くのはこわいな。」という気持ちでピアノを弾いたことがあります。私が通うピアノ教室では、毎年ボランティア活動の一環として、老人ホームで音楽祭を開いています。そのときに抱いた感情を今でも覚えています。

この人達とは、お年寄りの方ですが、中に視覚障害のある方や聴覚障害のある方がみえたので、このような表現になったのだと自覚しています。また、振り返ると、ピアノを弾くのがこわかったのではなく、障害がある方に目を向けられ、耳を傾けられ、そのような人と接することがこわかったのだということも自覚しています。見た目は普通でも、自分とは少し違うと思うと、どのように接してよいのかわかりませんでした。

演奏が終わると、驚くほどの拍手をいただきました。涙ぐんでいる方もみえました。そのとき私は、こわいという気持ちが薄れていきました。音楽を聞いて感動する姿はまさに自分と同じ。障害があると考えることで自分と違うという差別感情に似た気持ちを抱き、こわいという気持ちとともに、心の距離をとっていたことを恥ずかしく思いました。この音楽祭での出来事をきっかけに私は福祉に興味をもちました。

聴覚障害のある方について知りたいと思い、私は手話について調べることになりました。実際に障害福祉の講義に参加したり、市役所の福祉課に行ったり、手話サークルでお話を伺ったりしました。

「障害のある方々が元気に暮らせるようにサポートをしましょう。」障害福祉の講義で聞いた言葉です。一宮障害者相談支援センターがあることや、このような思いのもとで活動されている方々がみえることを私は知りませんでした。私は、何もサポートができていないし、共生という考えも、もっていませんでした。これから社会を築いていく際の大切な考え方を学ばせていただきました。市役所の福祉課では、手話で自己紹介の仕方を教えていただきました。そして、手話サークルを紹介していただき、実際に伺うことができませんでした。手話サークルでは、衝撃の連続でした。

サークルに参加されている聴覚障害のある方がギターを弾いていたことにまず衝撃を受けました。「音が聞こえないのに、なぜギターを弾いているのだから

う。「一瞬訳がわからなくなったことを覚えています。お話を伺うと、補聴器をつけていること、そして音の振動をからだで感じていることを教えていただきました。ギターを弾くだけでなく、よさこいを踊って楽しんでいることも教えていただきました。しかし、私が一番衝撃を受けたのは、「私がかわいそうじゃないのよ。」という言葉です。わたしの思いを見透かした言葉でした。

この言葉を発せられたのは、生まれつき聴覚障害があり、音を聞くことができないう方でした。その方は結婚されていて、三人のお子さんがみえるそうです。「大変な思いをして産んだのだけれど、子供達の声は一生聞こえません。さみしいですね。」と話されました。その言葉を聞いたとき、とても切なくなりました。表情や身振り手振りはもちろんですが、「コミュニケーションの多くを私は言葉に頼っています。言葉で思いを伝ええています。だから「愛する家族の言葉が聞こえないなんてかわいそう。」と私は思いました。こう思った直後の「かわいそうじゃないのよ。」でした。「ちょっと不便なだけ。だから不便なところを手伝ってほしいの。」と続けられました。

障害があることは、ハンデがあることであり、できることが限られていることだと思ってきました。それは間違いではないけれども、できることが限られることが、かわいそうと考えることは大きな間違いだということがわかりました。この考えは、相手の方に悲しくつらい思いをさせることを実感しました。「違いがあるけれど、これも私の個性だと思っています。」という言葉も私の心に響きました。自分自身のこれまでの考えを見直し、今後の生き方を考えていく経験となりました。

これまで障害のある方と出会うと、かかわらないようにしてきました。接し方がわからない、自分がどのように思われるかこわいという理由に自分自身の行動を正当化していたように思います。今、私はこれまでの自分を恥ずかしく思います。「何かお手伝いできることありますか。」と声をかけていこうと決意していますが、まだ行動する勇気がないことは事実です。これから障害についての理解を深め、自分ができていることを知っていこうと思います。これが、生きる人誰もが幸せに暮らせる社会の実現につながると信じて。その社会を私たちがつくっていききたいと思います。